

Bohemia), 西比利亞 (L. Koch, 1879, T. Thorell, 1875; Tomsk, Surgustskoj) 及び日本 (吉澤, 1930, 1933; 京都, 石塚, 1941; 厚岸) 等北緯略々35度以北の歐亞溫帶地方から記録され其の南限は夏期平均氣溫攝氏27度の線に略々一致して居り北は15度を示す地域に限られる様で此の地域以外の佛蘭西南部 中央亞細亞又は蒙古からは記録されない。

撰筆するに當り石塚氏の御盡力並に内田教授の御厚意に對し厚く感謝す。

蜘蛛類研究報告 (3)

八 木 沼 健 夫

- 1 マメイタキセキグモ再び現る
- 2 ヤマシロオニグモの一新變種
- 3 ナミハグモ *Cybaeus hellotiei* (Simon) とカチドキグモ
Bansia nipponica Uyemura に對する再検討
- 4 臺灣産蛛蜘蛛類 (1)

マメイタキセキグモ再び現る

大阪府立生野中學校教諭菊地政雄氏が昭和16年8月18日兵庫縣花屋敷附近で採集された蜘蛛を同定中、珍品マメイタキセキグモを検出し同地を本邦最北の分布地として認め得たのである。本種は從來インド、セーロン方面に分布するものとされてゐた所、昭和7年愛媛縣に於て高橋幸雄氏が之を發見し始めて我國の Fauna に入籍したのである。概要は岸田氏に依つて動物學雜誌上に報告されてあるが、同年11月再び和歌山縣で植村氏が之を發見された。爾來茲に約10年、今回再び之が見出されたことは分布研究上刮目に値するものである。よつて第3の產地として報告すると共に、その特徴、觀察事項を記し今後研究なさる諸彦の御參考に供したいと思ふ。始に當り貴重なる標本を戴いた菊地氏並に御教示を賜つた植村氏に深甚の謝意を表する。

昭和16年8月18日午前11時兵庫縣川邊郡川西町 (阪急電鐵寶塚線花屋敷驛附

近)で菊地政雄氏により採取された。ススキの葉先に近い葉裏に静止、その少し上部より2本の糸が引かれてゐた由である。從來本邦では昭和7年8月25日愛媛縣高縄山に於て高橋氏が採集し、同年11月7日和歌山縣那賀郡柄淵村に於て植村氏が採集せられし記録あるのみである。今回ののは兩地の何れよりも遙か北の方で現在の所北限をなすものである。しかし年平均気温 11°C の線は上記和歌山 愛媛、兵庫南部を連ねてゐる故、敢て不思議ではないのであるが、稀薄な存在ながら今後此線或は以南に於て發見される可能性はあるから、一層の御注意を御願ひする次第である。

本種はコガネグモ科 Argiopidae コガネグモ亞科 Argiopinae キセキグモ屬 *Ordgarius* に隸し學名を *Ordgarius hobsoni* (O. P. Cambridge, 1877) といふ。頭頸部は褐色で頭部に2個の小丘が縦に並び前方は後方より小さく、更に臍部前方に横に並ぶ小丘が2個ある。腹部は幅が長さに優り黄色の地に灰色の帯が2本複雑な斑紋を描き、前方の尖つた黄色斑が特に目立つ。腹部の背面及兩側にかけて數多の半球狀の突起があり、マメイタとは實に穿つた名前である。歩脚は褐色で黄色の輪紋を有する(體長は亞成雌で 8.5 mm)。

Ordgarius 屬は *O. monstrosus* Keyserling, 1886 を模式種として創設せられたものである。本邦には本種の外 キセキグモ *Ordgarius isekii* Kishida, 1912 が棲息しイチヂク或は櫻の樹上で數回採集されてゐるが共に ♀ ばかりである故、今後♂の發見に御注意願ひたい。*O. hobsoni* の圖は本誌 Vol. 1, No. 3, p. 99 植村氏論文に P. Pocock 氏の原圖が轉載されて居るから御參照ありたい。

ヤマシロオニグモの一新變種

マメイタキセキグモ及びキセキグモに関する文獻

Cambridge, O. P. (1877) P. Z. S. London, 1877, p. 562, pl. 56, fig. 3

Pocock, R. I. (1900) Fauna Brit. Ind. Arachnida, p. 230, fig. 76

中山直記 (1930) キセキグモの分布について *Lansania* vol. 2, no. 19, p. 129

岸田久吉 (1933) マメイタキセキグモ日本²の Fauna に入る *動物學雜誌* vol. 45, no.

531, p. 50

植村利夫 (1936) 和歌山縣産蜘蛛目録 *Acta Arachnol.* vol. 1, no. 3, p. 89

高橋幸雄 (1939) 愛媛縣産蜘蛛目録 *Acta Arachnol.* vol. 4, no. 4, p. 149

オニグモ属は色彩の變異多く一見別種の如き感を抱かせる事が屢々ある。殊にヤマシロオニグモ *Araneus scyllus*、オニグモ *Araneus ventricosus*、インサワオニグモ *Araneus ishigawae* 等は種々の變異を示し、餘程數多く見馴れた眼にも該種に同定し兼ねる事さへある。かやうな變異に對して一々名を與へて居ては煩しさを増すのみで却つて研究上の混亂を來す恐れがあり、多少の變異は同一種として取扱ふ方が便利である。しかし此所に記載せんとするヤマシロオニグモの變種は、上記の色彩の一變異に過ぎないが、本種は殊特なる變異の傾向を持ち、且つ同属の數種と同一の型を現して居り種に於ては非常な相違があるにかゝらず變種に於ては全く同一の色彩を有してゐる點に興味があり、今後其等の類縁關係を考究する資料ともなうから、他種に於て與へられてゐる如く本種に對しても便宜上一新變種名を附する事とした。

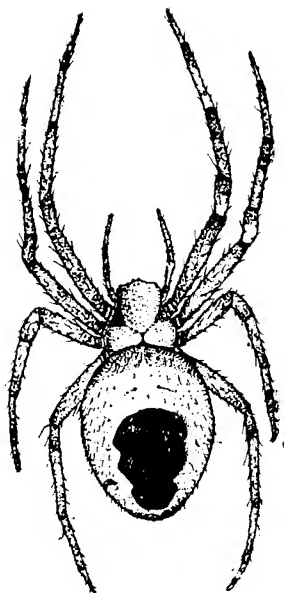
Araneus scyllus var. *nigromaculatus* var. nov.

アトグロヤマシロオニグモ (新稱)

(♀ (holotype)) 體長 13 mm. 頭胸部は黒褐色の地に白毛を生じ、上顎・下顎・下唇・胸板共に同じく黒褐色。下唇の先端及び下顎の内側は白色。觸肢は赤褐色で黒褐色の輪紋を有する。歩脚は腿節黒褐色、他の節は赤褐色の地に黒褐色の輪紋を有し、地色は末節に及ぶに従ひ黄色となる。腹部背面前方は黒褐色で背面は淡黄褐色、中央部は色淡く側方に到り濃色となる。背面には複雑なる斑紋なく中央より後方に圖の如き黒褐色の一大斑紋を有するのが著しい特徴である。腹部下面も黒褐色で胃外溝の後に1對、蛛疣との間に1對、蛛疣の前に1對の白點がある。

♂ (allotype) 體長 9 mm (亞成體)。色彩及び形態は holotype とよく似てゐるが、黒褐色の部分は上記のものよりも少し淡く、腹部側面より下面にかけてヤマシロオニグモの斑紋の面影を留めてゐる。背面の斑紋の周は極めて細い白線で縁取られてゐるが明瞭ではない。腹部下面には白斑が1對ある。背甲・上顎・觸肢・下顎・下唇・胸板・歩脚は全く holotype に同じ。

本變種は *Araneus scyllus* (Karseli) とは腹部背面の斑紋により明らかに區別し得るが、形態上からは殆ど相違が見られず、従つて變種として取扱ふべきである。本種に似た色彩の變異は全北地方に廣く分布する *Araneus nordmanni* (Thorell) 及 *Araneus raji* Scopoli (= *A. marmoreus* Clerck) に見られ、變種の



第 1 圖

Araneus scyllus var.
nigromaculatus var. nov. (♀)

みを以て比較すれば全く同一種の感がある。前2種は共に我國にも産し前者は樺太より、後者は樺太・北海道より發見されて居り、後者の變種は *Araneus marmoreus pyramidatus* Clerck として樺太より知られてゐる。今回の holotype は 1941 年 8 月愛媛縣宇摩郡銅山川畔にて石川重治郎氏採集、allotype は 1941 年 7 月奈良縣にて古河賢三氏採集に係る。今のところ本變種の分布地としては本州と四國が擧げられる。

**ナミハグモ *Cybaeus Mellottéi* (Simon) と
カチドキグモ *Bansaia nipponica* Uyemura
に對する再検討**

本誌 Vol. 3, No. 4, pp. 131—141 (1938) に於て植村利夫氏は從來 *Cybaeus Mellottéi* (Simon) として扱はれてゐた所の蜘蛛は氏の見られた範圍ではすべて別屬別種であるとの見解のもとに之に *Bansaia nipponica* Uyemura なる學名を與へ、*Bansaia* と *Cybaeus* に就き兩者の相違を詳細に發表せられ、既に發表された目錄のナミハグモもカチドキグモと改め、其後氏の同定されたものは殆どカチドキグモでナミハグモなる名は姿を消してしまつた感がある。爲に之等の蜘蛛に對しては種々の疑問が生れ、兩者の區別が明らかにされたに係らず *Cybaeus Mellottéi* と *Bansaia nipponica* とを同一種と見做したり、或は *Bansaia* の存在に疑念を抱かれる向きもある様である。筆者も兩者に對しては興味を以て研究を續けて來たが、未だナミハグモの實物に接してゐなかつた爲、多少の疑問を持ちながらも氏の說に賛成して來たのである。所が今回 *Cybaeus Mellottéi* に同定すべき蜘蛛(愛媛縣にて三好氏採)を見る事が出來たので更に研究に拍車をかけ、各地より *Bansaia* の標本を集め又自らも採集につとめ、今回採集された *Cybaeus Mellottéi* と實物につき比較研究をした結果、兩者は明らかに別屬別種なる事を確

め得たので茲に兩者の相違を掲げ以て植村氏の文献による説の正しきことを實物によつて證明したい。尙兩者の關係に就いては植村氏記載以外の重要な區別點を見出したが、氏の論じて居られる間疣によつては兩者を區別する事が困難なのは遺憾である。此點に就いては後日の研究に俟つ事にする。貴重な標本をお貸し願つた植村利夫氏、石川重治郎氏、小村忠夫氏、三好保徳氏に深甚の謝意を表する。

1. 研究材料とした標本

Bansaia nipponica Uyemura, 1938 カチドキグモ

- * 植村氏標本 (成♀東京芝、深澤氏採 Nov. 1937・成♂同左・成♀伊豆天城、高島氏採 Nov. 1936・成2♀和歌山、植村氏採 Oct. 1931・成♀東京江古田、植村氏採 Jan. 1936)
- * 小村氏標本 (亞成♀大阪府岩湧山、小村氏採 July. 1940)
- * 石川氏標本 (亞成2♀高知縣龍河洞の附近、石川氏採)
- * 筆者標本 (成3♀亞成2♂亞成♀大阪府岩湧山、筆者採 Aug. 1941・亞成♀大阪府・亞成♂♀大阪府妙見、筆者採 Aug. 1937)

Cybaeus Mellottéi (Simon, 1886) ナミハグモ

- * 三好氏標本 (成♀♂亞成♀愛媛縣宇和島市、三好氏採 Nov. 1940)
- * 筆者標本 (成♀♂亞成♀同上、三好氏より享く)

2. 兩種の比較

Bansaia nipponica と區別するに必要な *Cybaeus Mellottéi* の標徴を記す。

1. 體は成熟せるものにて *Bansaia* に比して非常に小さい。

	體 長	第 1 脚	第 2 脚	第 3 脚	第 4 脚
成♀	6.2	破 損	7.0	6.2	7.9
成♂	4.4	6.4	5.9	5.3	6.9

Brauer, Strand 兩氏の *Japanische Spinnen*, p. 295 には♀の體長 5 mm, ♂ 4.5 mm とあり、上記の測定と比べてよく似た大きさである。尙上記のもの外に成♀ 4.7 mm, 成♂ 4.4 mm, の2個體あり。之に反し *Bansaia* は何れも大きく、8 mm, 9.5 mm, 10.5 mm となつて居り (植村氏模式標本) 筆者の所有せる多數の標本を測定しても殆ど 10 mm 内外である (但し齋藤三郎氏の發表せられた青森縣産のナミ

ハグモは體長 11.5 mm (♀) でカチドキグモより大きいのは不思議である。

2. 雄の觸肢の膝節には特別な突起を有し、此の外側には小齒状のものが之を被つてゐる。又脛節の末端の外側は幅廣く突出てゐる。(Fig. 2 の 1)

カチドキグモにあつては膝節に何等の突起が見られない。

3. ♂の觸肢の膝節と脛節は略々同長で共に短い。

カチドキグモの觸肢の脛節は非常に長く膝節の 2 倍ある。外國産の *Cybaeus* を見ても膝節と脛節は略々同長である。

4. 下唇の幅は長さに優り 下顎の半分以上を越えない (Fig. 2 の 3)。又下唇の先端は深く凹んでゐる。

カチドキグモでは下唇の長さが幅に優り下顎の半分以上に達する。尙下唇の凹みはナミハグモ程深くはない。

5. 眼は前列前曲 (—) し後列は殆ど直線上に並ぶ。直眼は互に接近し前中眼同志の間は直眼と前側眼との間よりも小、後中眼間は後中・側眼間より僅かに廣い。

カチドキグモの前列眼も前曲してはゐるがナミハグモ程強くはなく、眼の中心を結ぶ線は略々端直である。前中眼もナミハグモよりは離れてゐて、前側眼との距離よりも大きい。

6. 上顎の前牙堤には 3 本、後牙堤には 5 本の大きな齒と 6 本の小齒が列生してゐる。

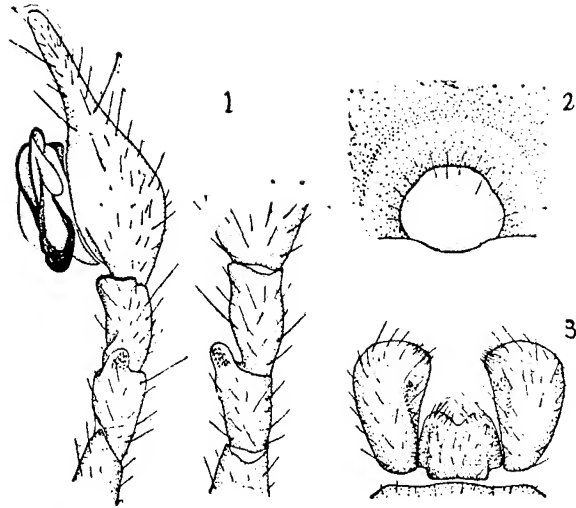
カチドキグモの後牙堤には 3 本の大きな齒と 4—5 本の小齒が列生してゐる。

7. Epigynum の形は楕圓形で大きく口をわいて居り、前方に何等の構造が見えない。

カチドキグモとの比較は Vol. 3, No. 4, Pl. 13 の圖を見れば明瞭である。

以上述べた所に依つて *Bansaia nipponica* と *Cybaeus Mellottéi* とは別屬別種として扱はるべきであることは明らかであるが 間疣の有無を以てしては兩者を分つ事が出来ない。 *Cybaeus* 屬の標徴として間疣のある事が擧げられてはあるが之とても本屬のすべての種に適用されるわけでもなく、*Cybaeinae* には間疣を有してなかつたり、又あつても貧弱なものもあり、少くとも此仲間には於ては植村氏の述べて居られる如く間疣を以て分類する事は至難であらう。Simon 氏の檢索表を見ても“間疣がある”の條を辿つて行つても“間疣がない”といふ條に達する事がある位で、今後の分類は他の標徴に置きかへらるべ

きではなからうか。
 現に *Cybaeus Mellotéei* にも極めて痕跡的な間疣を有して居るが、此程度ならば *Bansaia nipponica* に於ても見られ両者は大同小異である。植村氏は *Bansaia* を *Cybaeus* より分つに間疣を一つの重要な標徴として *Bansaia* には間疣なしと明記せられてゐるが *Cybaeus Mellotéei* に於ても間疣



第2圖 1. *Cybaeus Mellotéei* (Simon) 雄の觸肢
 2. 同 雌の Epigynum
 3. 同 下顎と下唇

なしと言へば言へない事はない。むしろ *Bansaia* と *Cybaeus* を分つにこの觸肢の膝・脛兩節を比較する方が明瞭と思はれるので植村氏記載の標徴に更に此の項を加へたい。

A. 雄の觸肢の膝・脛は略々同長で膝節の外側に突起を有す。下唇の幅は長さ
 に優る *Cybaeus*

AA. 雄の觸肢の脛節は膝節の2倍あり、膝節の外側に突起を缺く。下唇の長
 さは幅に優る *Bansaia*

分布地としては *Bansaia nipponica* は 本州・四國を、*Cybaeus Mellotéei* は 本州・四國・九州・北海道を擧げる事が出来る。

臺灣産蜘蛛類 (1)

今回漢山昆蟲研究所の横山光夫氏より多數の蜘蛛標本を貰ひ受けたのでその内種名の確定したもののみを掲げ、標本を寄贈下さつた同氏に感謝の意を表する。

1. *Leueduge blanda* (L. Koch, 1877) シロガネグモ

- 臺中州北山坑 12. 6. 3 ♀ 多數
2. *Tetragnatha japonica* B. et S., 1906 ヤサガタアシナガグモ
臺中州北山坑 12. 5. 30 ♂♀ 多數
3. *Tetragnatha gracilis* Stoliczka, 1869 ?
臺中州北山坑 12. 5. 30 ♀ 2 (幼)
4. *Araneus dehaanii* Doleschall, 1859 ミツカドオニグモ
臺中州北山坑 12. 6. 3 ♀ 1
5. *Araneus scylloides* B. et S., 1906 サツマノミダマシ
臺中州北山坑 12. 6. 3 ♀ 1 (非常に大形)
6. *Argiope keyserlingi* Karsch, 1878 ムシバミコガネ
臺中州北山坑 12. 6. 1 ♀ 4
7. *Nephila maculata* (Fabricius, 1793) マダラチヨラウグモ
臺中州乾溪 12. 5. 25 ♀ 多數 (幼)
高雄州恒春 15. 8. 一. ♀ 4 (成)
8. *Suzumia orientalis* Kishida スズミグモ
臺中州北山坑 12. 5. 30 ♀ 多數 (幼)
9. *Gasteracantha kuhlii* L. Koch, 1833 トゲグモ
臺中州北山坑 12. 6. 3 ♀ 2
10. *Argyrodes miniaceus* (Doleschall, 1857) アカキサフラフグモ
高雄州恒春 15. 8. 一. (マダラチヨラウグモの網に寄生) ♀ 2
11. *Dolomedes higenaga* Kishida, 1912 ヒゲナガハシリグモ
臺中州北山坑 12. 5. 30 ♂♀ 多數
-

愛媛縣産ナミハグモの一新種

八 木 沼 健 夫

昭和15年11月23日に三好保徳氏に依り愛媛縣宇和島市滑床の松林にて採集された蜘蛛の送附を受けたが、その中に極めて小形の成熟せるナミハグモ3頭あ